

「文化 と ことば」

Culture and Language

英 語 英 文 科

山 下 淑 子

Yoshiko Yamashita

ひところ、日本語の「わび」、「さび」ということばが一部の外国人の間でもはやされ、このための特集号まで出たことがあった。京都の古寺や茶室等の写真入りで、日本人が古来いかに「わび」、「さび」の境地を大切にしてきたかが紹介されていたが、このようにして日本人がはぐくんできた情緒に触れんとして日本へやってきた外国人は、そのような所を訪れ、身を以て WABI, SABI を味わおうとするのであった。

このように、ことばが文化と密接なつながりをもつ⁽¹⁾ということは、容易に考えられることであるが、ここでは、文化と言語の相互関係を二つの方向からさぐってみようと思う。

ここで文化というのは、人間の行動様式の総体ともいうべきもので、民族、種族など一定の人間共同体が、自然又は野蛮な状態のままに止ることなく、それ自身の特定の生活理想の実現を目指して徐々に形成してきた生活の仕方と、その諸表現のことであり、このような生活表現は、衣食住をはじめ、学問・芸術・道徳・宗教・慣習などを含むものである。

文化は社会によって伝えられ、広められて行く。個人は自分の意志から独立した特定の文化の中に生まれ、その文化をになうと共に、その文化によって思考や行動を規定される。このような意味での文化は、色々な手段、媒体によって伝播し、時代と共に子孫に受け継がれてゆくが、その手段の中で最も強力なものの一つがこ

とばである。文化は社会の人々に共有されることが大きな特徴であり、個人が社会とかかわりを持つ際には、ことばの媒介なしに文化を撰取することは考えられないのである。「文化」と「ことば」との間には、このように切り離すことの出来ない関係がある。文化内容がことばを作り出してゆく、或いはことばを変えてゆくという場合もあり、又、ことばが思考あるいは文化を作り上げてゆくと考えられる場合もある。先に二つの方向といったのはこのことである。

まず第一に、文化がことばを作り出してゆく⁽²⁾ごく卑近な例をみてみよう。今から三年前、はじめてハワイに行きそこで先ず気になったことばに「サイミン」と「テリヤキ・バーガー」というのがある。ドライブ・イン等ではよく見られる看板なので、早速注文してみると、「紙製の容器に入ったラーメン」と「醤油をつけて焼いた肉を間にはさんだバーガー」が出てきた。「サイミン」は中国語の「浄麵」からきたものらしく、「他に何も入らない中華そば」を意味するようであるが、その時は中国語くさいと思っただけであった。「テリヤキ・バーガー」の方は現物を見てなるほどと思った。日本で「テリヤキ」といえば、魚に砂糖醤油をつけて網で焼いたもので、この料理法を肉に応用して「テリヤキ」の名で呼んでいることがわかった。明治百年の記念行事が、日本各地で色々行われているが、ハワイ移民も丁度百年の歴史をもっ

て居り、日本からハワイへ移民した所謂一世の人々が、この料理法を日本からハワイへと移植し、百年の間に、この便利で味のよい料理法がより重要な蛋白質源である肉に応用されてきたわけである。土着のポリネシア独得の料理——例えばルアウのブタの丸焼き、タロイモから作られたポイ等に混って、中国から入っているあらゆる中華料理、韓国のキムチ、日本の伝統的料理に加えて、先程の「テリヤキ・バーガー」等が賞味されている様子を見てみると、今から百年前に、ポリネシア文化の上に、アジアの文化、日本の文化等が次々に入りこみ段々と融合し或いは変貌をとげて行った様子がわかるような気がした。このように、ハワイで使われている「テリヤキ・バーガー」ということばは、大げさに言えば、ハワイの文化的背景を反映しているといえよう。この場合には、文化がことばを規定しているといえるが、逆にことばが私達の思考、ひいては文化を規定するという見方を考えてみたいと思う。

(3)

これは、サピア・ホーフの仮説 (the Sapir-Whorf Hypothesis) といわれ、言語学上の相対性原理 (the principle of linguistic relativity) ともいわれている学説である。アメリカの人類学者・言語学者であるサピア (Edward Sapir) からはじまって、その弟子であるホーフ (Benjamin Lee Whorf) で或る程度迄完成した説で、その主な点は次のようなことである。

1. all higher level of thinking are dependent on language
2. the structure of the language one habitually uses influences the manner in which one understands his environment

先ず第一に、すべての高度な思考は言語によるものであるということである。第二に、人々が普段使っている言語は、人がそのまわりの環

境を理解する仕方に影響を及ぼすということである。即ち、違う言語を話す人々は、それぞれ宇宙の森羅万象を違ったように見て、違った様に評価するのである。サピアをはじめとしてホーフ等は、色々なアメリカン・インディアンのことばを研究しているうちに、インド・ヨーロッパ語族に属する英語・フランス語・ドイツ語等にはない幾つの特徴を見つけ出し、アメリカン・インディアンの人々が物を見る目は、ヨーロッパ人やアメリカ人の見る見方とは非常に違うことに気づいた。

例えば、英語で snow に当る語は、エスキモー語では三つあり、固まった雪、とけかかった雪、降りたての雪等がそれぞれ一語で表わされている。同じ対象である雪を見ながらエスキモー人は雪をこまかく分けて見、英語を話す人々はこれを総括的に見るわけである。勿論、形容詞をつけて melting snow… 等という言い方は英語にあるが、これらを一語で表わすわけではないわけである。このような例は数限りなくあるが、日本語と英語を較べてみても、このような例をすぐ見つけることが出来る。例えば、日本語では「水」、「湯」という別々のことばがあるが、英語では「湯」に当ることばはなく、hot water と表わすわけである。「兄」、「妹」というようなことばも、elder brother, younger sister と表わさねばならず、「兄弟」という包括的なことばは、比較的専門用語 (生物学・人類学) として用いられる sibling 以外はなく、日常はこのようなことばは使われない。

このように、サピア・ホーフの考えの根底には、切れ間なく続いている現実世界 (reality) を区切っているものはことばで、それによって人間の思考が可能になるという考え方がある。切れ間なく続いている reality 或いは cosmos

というのは、例えていえば、まだ各色に分かれない色の世界のようなものである。

一般に色を分けるには、物理的にいえば、波長 (wave length)、色合 (hue) 光度 (brightness) で、この三つの基準で日本語では、一般的に赤橙黄緑青藍紫というように分けるが、フィリッピン ⁽⁴⁾ の Hanunoo という言語によると、色に関することばは、第一のレベルでは四つに分かれ、次のようになる。

1. (ma)be:ru 'relative darkness (of shade of color), blackness' (black) (ma-は having の意)
2. (ma)lagti? 'relative lightness (or tint of color); whiteness' (white)
3. (ma)rara? 'relative presence of red; redness' (red)
4. (ma)latuy 'relative presence of light greenness; greenness' (green)

mabi:ru は英語の black, violet, indigo, blue, dark green, dark gray 及びその他の暗い色合や混合色を包括することばである。又、malagti? は white 及び他の非常に明るい色合とその混合色を含み、marara? は maroon, red, orange, yellow や、これらの色が入っている混合色を含み、malatuy は light green 及び green, yellow, light brown の混合色を含むことばである。

このような色についてのことばを知るために、原住民に色々な布はしや植物などを見せて、これは何と言わせてデータをとった結果、すべての色はこの四つのカテゴリに入ったということである。このような四つの色の基準となっているものは、この Hanunoo の人々のまわりの環境内での現象と関係が深く、次のようなものがある。

第一に light と dark の対立概念がある。

(ligti? vs biru)。第二に dryness と wetness (freshness) の対立がある。(rara? vs latuy)。

この対立は植物と大いに関係がある。殆どすべての植物は新鮮な緑の部分をもって居り、生の新鮮な野菜を食べることは pag-latuy-un (<latuy) である。新しく切った竹のきらきらとした、しめったかっ色の部分は malatuy であり、かわいた或いは熟したとうもろこしは marara? である。第三の対立概念は、deep, unfading, indelible (more desirable material) と pale, weak, faded, bleached or 'colorless' substance である。(mabi:ru, marara? vs malagti?, malatuy)。従って red beads は white beads より値打があるものとされている。また環境からくるものとして、green beads は 'unattractive, worthless' の意味で、これは、まわりのジャングルに沢山この色がみられるため、装飾品としては価値がないという考え方からきている。

以上の例で、言語が違えばカテゴリのたて方が違い、従って思考パターンも変わってくるということが或る程度明らかになったと思う。

次に、ことばと文化との関係を通時的・共時的に考えてみたいと思う。通時的、共時的というのは、二十世紀のはじめに、スイスの言語学者ソシュール (Ferdinand de Saussure) が diachronique, synchronique と用いた語の訳語である。ソシュール以前、ことばの研究は主として、ことばの変化に焦点を置いた歴史的研究で、所謂通時的であったが、ことばの研究は、或る特定の時を区切ってその特定の時期について行うことが出来、これが共時的ということ、或る言語のみについて研究する場合と、他の言語と比較する場合がある。

言語と文化が通時的、共時的にどのように関連をもっているかを、日本語の敬語について考えてみよう。敬語の使い方は、現代では昔より

大分簡単になっているが、敬語を正しく使う為には、話し手と聞き手と話題にのぼる人との上下関係が微妙にからみ合って、ことばの選択のカギとなっている。

封建制度の発達した江戸時代の社会では、身分の上下関係は絶対的なもので、士農工商の階級制度がはっきりしていたので、武士はその下の階級の人に気に入らないところがあれば、「切捨御免」も出来たのであり、極端に言えば、敬語が適切に使えなかった為に首を斬られた人もあったわけである。第二次世界大戦終結以前は、天皇に対する敬語は一段と高い特別な用法であった。

国立国語研究所が出している「敬語と敬語意識」⁽⁵⁾という本によると、最近敬語を使う際の上下関係の基準は、終戦以前のように必ずしも身分ではなく、商人と顧客、PTAの父兄と先生というように、多少の利害関係を含む場合も多く、その基準となる概念が大分変っているということである。それから、その場の事情によることもあり、例えば身分の上では上位にあっても、その人が下の人に借金を申し入れなければならぬ等という場合には、言葉づかいが丁寧になる傾向があり、又、女性は男性に較べて、場面や相手による使い分けが少なく、のべつまくなしに丁寧なことばを使おうという意識が強いそうである。

封建時代、現代というように、或る特定の時代の敬語の使い方を研究するのは、敬語の共時的研究であり、敬語の変遷を時代の推移に従って研究するのが通時的研究である。

日本語の敬語のこのような制約は、まとめて考えてみると、上下関係、性別、年齢、教育、親密度などから生ずるもので、こういった社会のきまりを無視したことばづかいをした時には、コミュニケーションが断絶するか、一方が

不愉快な思いを経験するような結果に終り、有効なコミュニケーションは成立しなくなるからここにも、ことばと文化的背景の密接な関係を見出すことが出来るのである。

ここで最後に、ことばが概念形成に関与し⁽⁶⁾それが文化的出来事へと波及してゆく過程をみてみよう。

アメリカの人種偏見一特に黒人に対する偏見の理由は色々あるが、その一つに考えられることは、黒い皮膚の色と結びついた black ということばの含意から形作られた概念 (concept) の影響である。黒という色は、聖書の中に sin, ignorance, wickedness, evil 等の含意をもって書かれている。例えば Job: "My skin is black" cries Job in his great self-arraignment, using this figure to show how heavy was his burden of sin." とある。その後、Shakespeare の作品にも、黒は比喩的に evil, wicked, horrible, dismal な含意をもって書かれている。例えば Othello の中で Brabantio の怒りは、彼の娘が "the sooty bosom of such a thing as thou" (I, 2, 70) に走ることであり、皮肉にも Othello は自分で次のように述べている。

Her name, that was as fresh

As Dian's visage, is now begrimed and
black

As mine own face. (III. 3, 387)

1923年から子供達に読まれているロフティング(Hugh Lofting)の書いた Dr. Dolittle の物語にも Bumpo という王子が、色が黒いばかりに、「眠り姫」にふられてしまい歎き悲しむ場面がある。ドリトル先生は、猿の伝染病をなおしに色々な動物達を連れてアフリカに行くが、ここでこの一行は black king に捕えられてしま

う。おうむと猿は、そこの庭で、王子の Bumpo に会う。Bumpo は ‘ugly-gnome-like blackman with a huge nose that covers most of his face’ という姿である。おうむと猿はその王子が大声で ‘If only I were a white prince!’ と歎いているのをきき、おうむは、もし王子が自分達の逃げるのを手伝ってくれたら、ドリトル先生が彼を白くしてあげると約束し、しばらくの間だけ白くなる塗り薬を与えて、まんまと脱出するのである。

このように、色々な書物によって、black=evil, horrible, ugly という概念が人々の心の中に幼い時から知らず知らずのうちに植えつけられてゆき、それが潜在意識となってゆくことが考えられるのである。⁽⁷⁾

文学とことばとの微妙なつながりはここであらためて論ずるまでもないが、二つの異なった文化的背景をもつ言語間の翻訳を試みる時、我々は文化とことばとの相互依存がどれほど深いものであるかを経験することがある。

Notes

(1)九鬼周造著「いきの構造」(昭和五年、岩波書店)は、このような研究を掘り下げて行ったものである。

(2)借用語、新語の形成される過程を調べてみると、このような例に類似したものが多い。

Cf. Robert A. Hall, Jr. *Pidgin and Creole Languages* (Cornell University Press, N. Y.; 1966)

(3)Cf. John B. Carroll(ed.), *Language, Thought, and Reality* (Selected Writings of Benjamin Lee Whorf)(M. I. T. Press, Mass.; 1956)

(4)Cf. Harold C. Conklin, ‘‘Hanunoo Color Categories’’ *Language in Culture and Society* (pp. 189-192)(Harper & Row, Publishers, N. Y.; 1964)

(5)国立国語研究所編、「敬語と敬語意識」(昭和32年秀英出版)

(6)Cf. Roger Brown, *Words and Things* (The

Free Press of Glencoe; 1958)

(7)Cf. Harold R. Isaacs, ‘‘Blackness and Whiteness’’ *The Norton Reader* (W. W. Norton & Company, Inc.; 1965)